



THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN  
弘前大学附属図書館報 No.28 2008.11

目次

巻頭言 附属図書館の新たな出発のために	1
特集 第4回『言語力』大賞コンテスト	3
lead-off 本との出会いを楽しむ〈第2回〉	8
lead-off 図書館に関する話題〈第2回〉	9
学術講演会報告	11
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧	12

## 附属図書館の新たな出発のために

附属図書館長 長谷川 成一



附属図書館長室には、旧制弘前高等学校図書室にあった木製の置物（写真参照）が据えられている。置物の樹皮の表面には、昭和21年（1946）頃に刻まれたと推定される文があり、それをここに紹介したい。

*Amicus Plato, sed magis amica veritas*

プラトンは（私にとって）親しき人ではあるが、しかし、真理はより一層親しき存在である

（アリストテレス『ニコマコス倫理学』第1巻第6章冒頭の「イデア論批判」の箇所の一節〈原文はギリシャ語〉を典拠にしたラテン語。人文学部の今井正浩教授のご教示による）



周知のように、終戦後、弘前市も県内他市と同様、物資の欠乏は極に達し、食料も満足に調達できない状態が続いていた。劣悪な環境にありながらも、真理を追究しようと勉学にいそしんだ旧制弘前高等学校生たちの燃えるような向学心を、我々は上記の文の中に汲み取ることができるのではなかろうか。ふり返ってみて、もの余りと飽食の時代にあつて、彼ら高等学校生よりも遙かに恵まれた勉学の環境を享受しながら、果たして私たちは当時の彼らが<sup>かつもく</sup>刮目するような研究・教育の成果をあげているだろうか。自問しているこの頃である。

ところで、平成18年(2006)3月に策定した将来構想の中で、本学附属図書館のポリシーとして、「学生のための教育・研究支援を目指す」が掲げられている。本年4月、私が館長に就任した際に、上記のポリシーを十全に実現できているかどうかを検証する意味もあつて、日頃、本館を大いに活用しておられる教員・院生の方々から、本館への不満・意見・要望などを寄せてもらった。その結果、いまでも改善の余地のある事柄が山積しているのではないかという認識にいたり、支援の内容をより一層充実させるため、全館員の協力を得て、次の4点にわたる主な事業を実施した。

1. 本年6月から本館の参考調査のセクションを昼休みの時間も開放して、学生・教職員の利用に供することにした。
2. 8月上旬、利用者の対応については、人文学部の森樹男准教授を講師として、館内でロールプレイングを伴う職員研修を実施し、利用者への対応の円滑化をはかった。
3. 10月から、文献複写と図書借用のWeb依頼を教員とともに学生も利用できるようにした。加えて、学外からも(自宅や出張先からも)アクセスできるように変更。
4. 11月17日から、本館と医学部分館・保健学科分室との間の図書貸出と返却に関するサービス(Webでの申し込みによる)を開始した。

以上に掲げたほかにも、種々改善点はあるが、特に掲げることはしない。本館では日々、館員が上記のポリシーに基づいて学生諸君の教育・研究の支援にいそしんでいるが、学生・院生諸君は果たして附属図書館をどれだけ活用しているだろうか。近年の傾向として、図書館利用者は毎年漸減状態が続いている。その原因は、電子ジャーナルの導入や、インターネットの利用によって、必ずしも図書や紙媒体に依拠しなくても研究がある程度まで進展させられるという現実があることも承知している。

しかし、我々はもう一度、冒頭に掲げた<sup>しんげん</sup>箴言をかみしめる必要があるのではなかろうか。真理を希求する精神が真摯であることこそが大事なのであり、そのステップとして、さらにはスプリングボードとして本館を大いに活用していただきたい。それが、本学附属図書館の新たな出発につながるに違いないと確信しているからである。

(はせがわ せいいち)

# 特集 第4回『言語力』大賞コンテスト

## 言語力大賞コンテストを終えて

第4回優秀賞受賞 理工学部2年 佐久間 愛香



私が今回の言語力大賞コンテストに応募した理由はほんの些細なものでした。

まずは私が膨大な日数の夏休みを持って余しかけていたこと。二か月も休みがあったら本好きの私はきっと毎日読書をして過ごすことになるでしょう。しかし読書にはお金がかかるのです。一日平均一冊としても単純計算で六十冊。私にはそんな財力も本を置く部屋のスペースもありません。ただでさえ「二階の床が本の重みで抜けて一階の居間がつぶれる」と母に呆れられているのに。

子供のころから本を読むのが好きだった私はいつの頃からか自分でも小説を書きたいと思うようになっていました。自分がわくわくして読んだようなお話を、いろんな人が楽しめる小説を、いつか自分でも書いてみたい。そんな風に思っていたのです。夏休みというのはそんな私にもってこいの状況でした。話を考えている間はきっと本を読んでいる暇もないでしょう。長い休みを楽しく過ごせる上に、これ以上蔵書も増えない。まさしく一石二鳥です。

そしてどうせ書くならどこかの賞にでも応募してみたい。私はそう思いました。今までも何度か文学賞などに投稿したことはありますが、さて今回はどこにしよう。そんなときに出会ったのが言語力大賞コンテストでした。枚数が十枚というのも書きやすいし、応募先が大学図書館というのも市内に住む私にとってはお手軽です。そしてなにより副賞がとても豪華です。図書券で渡されるそれは、財布の中身をほとんど本に費やす私にはすごく魅力的に思えます。夏休みを有意義に過ごせて、あわよくば図書券を手にし、また本を買う。そんなプランが目の前に広がりました。みしみし音がして今にも抜けそうな床のことは忘れ、私は机に向かいました。

今回応募する上で一番役に立ったのは弘前大学附属図書館のウェブサイトでした。過去の受賞作品も読める上に、その講評まで閲覧できます。これから同じように小説を書く者としてとても参考になるし、審査する側の気持ちにも立ってみることができました。初めは私も「いったいどんな作品が受賞しているのだろう」「自分は的外れなものを書いているのでは」と不安でしたが、これを見ることができてとても自信ができました。賞に応募しない人でも、本を読むのが好きな人には読んでみてほしいと思うような面白い作品がたくさん掲載されていました。

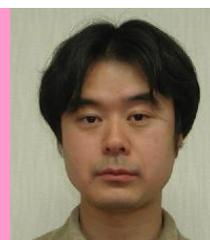
図書館サイトのおかげで話を考えるところから書き終わるところまで、私はとても楽しんで

作業することができました。しかし一方で残念だったのは、言語力大賞コンテストの存在を知らない人が沢山いるということです。私が賞をいただいたというのを聞いて「そんなコンテストがあったのは知らなかった」「私も出したかったのに」という声がいくつも聞こえてきました。できることなら次回からは学内にもっとたくさんポスターを掲示するなどしてコンテストの知名度をあげ、いつか弘前大学の名物になればいいなと思っています。私もとりあえずは図書館のウェブサイトのことをみんなに教えて、閲覧するように勧めてみます。受賞作品を見た人が「あ、私も書けそう」と思ってくれるように。

(さくま あいか)

## 第4回言語力大賞コンテストに寄せて

人文学部准教授 飯 考行



私の専攻は法学で、文学は主に古めの随筆を勝手気ままに好んで読む程度に過ぎない。審査委員として適任なのか心もとなかったが、他に文学専攻の委員がいらしたこともあり、大船に乗った気持ちで素人の視点から務めることにした。つまり、何の気なしに文字を追って、その作品に惹き込まれるかどうかにもっぱら基準をおくことに心がけた。

応募作の詰まった封筒を渡されて、研究室で紐解いてみると、三十余あり、家族、友人や恋愛関係の機微や感情を仔細に描きたいいわゆる純文学のほか、メルヘン、サイコホラー、SF、歴史もの、ゲームストーリー、評論など、内容は多岐にわたった。夕食をとり、できるだけ気持ちをまっさらにして読み進めた。規定字数の制約のなか、惹き込まれる作品に出会えるのか不安もあったが、あにはからんや、心に留まる文章はいくつかあった。一読した印象のみでは奇抜な作品のみ印象に残る恐れがあるので、二、三度すべて読み返して、個人的な推薦作をピックアップした。

引き続いて、取り出した作品に順位をつける作業にとりかかった。この段階で、対象作は十指に満たなかった。後の委員会選考で優秀賞となった「彼女は海に帰った」は、何気なく読ませて奇抜さはないものの、フィクションとして抜きん出ており、登場人物の肌の白さ、プールの水色、同窓会での友人の茶髪など、舞台設定に応じた配色がさり気なく上手く、そのまま映像にできそうに感じた。同作にはもちろん高順位をつけたが、実のところ、その他の個人的な推薦作は、最終的に佳作に入ったものと入らなかったものに分かれる。受賞作は、全委員の総

意にもとづき、いずれも疑いなく素晴らしい内容だが、その他にも心に残る作品があったことは付記しておきたい。そうした日の目を見ない傑作を密かに味わえたことは、審査委員の役得とすべきであろう。

委員会の選考過程を通じて、個人的に高順位をつけた作品が、他の委員から好評を得られないなど、自分の見る目に自信を失いかけ、文学的素養のないことがあらためて明らかとなった。この点には、私を含めた委員の年代と応募者の年代の時代感覚の違いも関わっていたかもしれない。ただし、独自に蓄えた感覚を文字に（誤字なく）表した作品は、テーマにかかわらず底光りし、複数の委員から票を得ていたように思う。メールやブログではお目にかかれない、自分自身で育んだ感性を活かしながら推敲を重ねた力作、時代を問わない言葉が、続々と生み出されることを期待したい。最後に、受賞者の皆さんはおめでとうございます、惜しくも落選となった皆さんは落ち込まずにまたチャレンジして下さい。

（いい たかゆき）

## 「言語力」の可能性に挑戦しよう！

人文学部准教授 渡邊 麻里子



今年初めて、言語力大賞の審査をさせていただきました。私自身、改めて「言語力」について考えるよい機会となりました。三十数点の作品を読ませていただいた感想を記します。

文芸作品の部門では、大学生らしい素敵な作品が多いと思いました。それぞれの作品のテーマは、愛（男女の愛、親子の愛、兄弟の愛）、友情、未来への思い、幸福など様々で、人間の永遠のテーマと思えるものに、皆さんも普段、真正面から向き合っていることを実感しました。全体に、筆者の心優しい人柄を想起させる作品が多く、嬉しく拝読しておりました。

しかし一方で、読者への意識が欠けているように感じる作品もありました。確かに、何も挑戦しないよりは、「応募した」という積極的な意欲は評価したいと思いますが、自分の感情を一方的に吐き出し、書き捨てたようなものは、作品とは言えないと思います。提出した作品は、自分とは異なる他者に読まれる訳ですが、応募作品には、読者をどれだけ意識したか、疑念を感じるものがありました。誤字・脱字の多い作品は論外ですが、自身の感情を無雑作に表出し、その心情が受け取ってもらえるか、その表現が相手に伝わるかどうかという配慮に欠けた作品は、言い方は悪いかもしれませんが、自分勝手な作品だと思います。勿論、文芸作品の場合、

言葉を尽くして感情を伝えるということがすべてではありませんし、意図して抽象的な表現を選び雰囲気を作りあげることもあります。それにしても、提出する前にもっと入念に読み直し、さらに推敲すれば、より素晴らしい作品になったのではないかと思えた作品があったことは、とても残念に思いました。

言語は、人と人との間で、何か——感情であったり、メッセージであったり——を伝えるために用いるものです。発した言葉は、相手に受け取ってもらって初めて意味が生まれます。受け取ってもらうためには、相手を意識しないといけません。どういう相手か、どういう立場か。相手は、自分とは異なる人です。会話でも、メールでも、電話でも、そして文章でも、相手を考えない言葉は、決して伝わらないと思います。どうすればより強く、より深く伝わるか、考えてみる必要があると思います。

実際、言いたいこと、思っていることを言葉で伝えることは、とても難しいことだと思います。私自身、自分の「言語力」の乏しさを常に感じ、悩み続けております。

しかし、言葉には無限の可能性が 있습니다。同じような表現に思えても、ほんの一文字、一言の工夫で、印象が全く変わります。受け手の立場を意識して、自分の文章を、より伝わるものにしていきましょう。

来年も言語力大賞は行われます。是非多くの学生さんたちに、「言語力」の可能性に挑戦していただけたらと思います。

(わたなべ まりこ)

## 「言語力」大賞コンテストのあり方

21世紀教育センター高等教育研究開発室教授 土持 法一



文学的評価でなく、教育的評価でもかまわないとの事前の説明を受けたが、学生からの応募作品を読みながら、とても自分の「力量」では評価できるものでないと、審査委員を引き受けたことを後悔した。何よりも、評価基準が不明確で、どの点を評価して良いのかわからず苦労した。幸い、順位だけで、評価点までつける必要がなかったので助かった。結局、「理解できる」という単純な物差しでしか評価できなかった。このような評価では、文学的素養を有しているかもしれない学生の資質を見逃してしまう恐れがある。

文学的作品の審査には、この分野に精通した教員から審査委員を選ぶべきで、該当する教員

がない場合は、外部から審査委員を委嘱するなどの配慮が必要である。

今回のコンテストでは、文学作品部門と評論部門の2部門であったが、附属図書館主催の言語力大賞コンテストの「目的」には、「問題解決のための調査能力、論理的思考、説得力のある表現」さらに、「言語力及びコミュニケーション能力の向上を図る」ことも含まれているのであるから、更なる工夫・改善が求められる。大学における言語力を高めることを目的とするのであれば、「ブックレビュー」のようなものも望ましい。たとえば、本学の教員に学生に読んでもらいたい「ベスト10」の書物をあげてもらい、附属図書館内に陳列し、学生に自由に選んでもらって、批評を書いてもらうなどである。これなら、多くの教員が授業で実践していることなので、審査委員としても加わりやすい。本コンテストは、「活字文化の日」に合わせて、本との出会いを学生に大切にしてもらいたいとの趣旨も含まれているのであるから、附属図書館の本に触れる良い機会である。

過去の審査委員からも指摘されているように応募期間が短すぎる。これでは優れた作品は生まれない。過去1年間に執筆した作品まで遡って応募できるように配慮すべきであろう。また、「ブックレビュー」だけでなく、「基礎ゼミ」など共同プロジェクト作品の提出も可能にするなど、本学の教育ニーズに合致した言語力大賞コンテストのあり方が求められる。

(つちもち ほういち)

#### 第4回 弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト 受賞者一覧 (平成20年度)

応募総数32点 (I 文学作品部門30点、II 評論部門2点)

部門	賞	学部	学年	氏名	タイトル
I 文学作品部門	大賞	該当作品なし			
	優秀賞	理工	2年	佐久間 愛香	彼女は海に帰った
	佳作	人文	1年	西沢 瑞穂	母親のカガミ
	〃	人文	4年	浅野目 睦美	ラジオの雨
	〃	人文	4年	公平 克彦	ノモスセイバー
II 評論部門	該当作品なし				

受賞作品及び講評を、弘前大学附属図書館ホームページに載せていますので、興味のある方は是非ご覧ください。

[第4回受賞作品] (下記 URL から、第1回～第3回にもリンクしています)

[http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/gengoryoku/gengoryoku4\\_sakuhin.html](http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/gengoryoku/gengoryoku4_sakuhin.html)

## 本にノックアウトされて

教育学部教授 奥野 忠徳



2年ほど前だったか、所用で仙台に行き、帰りの新幹線で手持ち無沙汰なのもいやだなと思い、ぶらっと駅前の丸善に入った。ふと見ると、The Da Vinci Code という英文の本が山積みになっていた。なにげなく手に取り、パラパラと見たら、簡単そうな英語でなにやら面白そうな内容なので買ってみた。新幹線に乗り込み、さっそく読み出した。内容があまりに面白く、やめられない。その内、弘前に着いてしまったが、帰宅してもやめられず、ずっと読み続け、ほぼ徹夜してしまった。これほど本の世界に引き込まれたのは久しぶりだった。翌日、翌々日も寝食も忘れて一心不乱に読み続けた。500頁にも及ぶ長編小説であるが、あっという間に読破したように思う。完全に著者 Dan Brown にノックアウトされた格好だ。翌年、また最初から、今度はかなり丹念に読んだ。プロットがわかっても同様に引き込まれる。今度は、英語の一字一句にこだわり、細かい考証をしながら読み進んだ。たとえば、Opus Dei という組織が登場するが、ネット検索してみると、本にある通り、それが実在し New York に本部を置いて活動していることがわかった。しかし、事実とは合わない記述も多い。例えば、主人公 Langdon と Sophie がルーブル美術館のトイレから石鹼に GPS 発信機を埋め込んで窓から、下にいたトレーラーに投げ込むというシーンがあるが、実際にはそのような場所にトイレはないようである。あるいは、Langdon と Sophie が Saint-Lazare 駅から北フランスの Lille 行きの特急に乗ったと装う場面があるが、この特急は Saint-Lazare 駅ではなく、Nord 駅から出ているはずである。このような細かいことは置くとして、この小説の真骨頂は、ヨーロッパ文明を支えるキリスト教の根幹を推理小説仕立てにしたことである。小説は、ルーブル美術館でその館長が殺害され、館長が謎の文字を残すという場面から始まる。さまざまな謎を解いていく内に、背後にはとてつもなく大きな力があることが明らかになっていく。その過程で、ダ・ヴィンチ、ニュートン、ローマ帝国のコンスタンチヌス帝、 Templar 騎士団、マグダラのマリアなどがキーパーソンとして登場し、さらに、「最期の晩餐」「岩窟の聖母」などさまざまな絵画や、ルーブル美術館、ウェストミンスター寺院などの建築も登場する。そのスケールは大きく、現在のヨーロッパ文明についていろいろと考えさせられるテーマを含んでいる。上にも述べたように、小説であるからにはすべてが事実というわけではないが、かなり大きなテーマを扱っており、この小説を基に、いろいろと自分で思索を深めていくことができる一冊である。できれば原文の英語で読みたいものである。

(おくの ただのり)

## 医学部分館の改修と

## 保健学科分室との統合について

医学部分館長 蔵田 潔



弘前大学における図書館関連の中期目標のひとつとして、医学部分館と保健学科分室を統合することが掲げられている。医学科・保健学科における学生および教職員の利便性を考えれば、現状のまま統合しないことが望ましいが、運営費交付金の減額等に伴う本学における事業の見直しという点からは、統合はやむを得ない選択であろう。この目標を実行するため、正村前館長が示した案をもとに、医学科・保健学科双方の委員から構成される附属図書館医学部分館運営委員会において検討を開始した。その結果、分館・分室双方の図書館業務を医学部分館で一元的に行うこととし、保健学科分室は閉鎖することとした。しかし、そのような統合を実際に行うとなると、保健学科にある図書・雑誌をすべて医学部分館に収納することは物理的に不可能であり、図書・雑誌の置き場所の問題を解決しなくてはならない。また、保健学科分室では学生さんの図書閲覧や貸し出しなどの利用が大変多いと聞いており、図書館サービスの低下を極力抑える方策が必要である。

折りしも、本町地区総合研究棟（旧基礎校舎）第Ⅲ期改修工事が行われており、その中に医学部分館の改修も含まれている。そのため、工事完了までの間、医学部分館は地階学生自習室等に仮移転中である。改修に先立ち、医学部分館の限られたスペースの中で統合後の図書館機能を維持・充実させるため、現状のフロアプランの見直しを行うこととした。

具体的なフロアプランを事務局施設環境部に改修計画として提出するに当たり、分館・分室の統合後には、保健学科分室からの図書を収納するスペースが新たに必要となるが、その場合でも、閲覧スペースを確保することを最優先とした。そのため、現在の1階事務室を縮小することにより閲覧用座席を確保するとともに、地階荷解室物品を地階保存庫へ、2階展示室内資料（松木文庫等）を臨床研究棟内へ移設する予定である。さらに、閲覧室資料及び機器配置等の見直しを行うこととした。保健学科学生の利用頻度の高い学習用図書及び雑誌など、分室から分館へ移行する資料は、主に分館積層書庫5層（2階閲覧室から常時入庫可能）に配架する予定である。一方、保健学科側のご厚意によりこれまでの保健学科分室事務室と開架資料スペースを図書資料収納スペースとして使わせていただけることになった。分室のそのスペース

には、統合後も分室にそのまま残す資料と、分館において利用率の低い図書・雑誌図書・雑誌等を移動して収納するとともに、分館・分室の重複図書・雑誌、あるいは電子的資料で代替可能な資料を極力廃棄することにより、統合後の分館のスペース確保を図る予定で準備を進めている。

改修後の建物は、壁の一部撤去と天井および床の高さが統一されるようにし、これまで制約の多かった閲覧室の書架等の配置について自由度が増すように計画している。また、空調設備の更新や館内の静寂を保つための工夫を施すなど、図書館としての使い勝手がこれまで以上に良くなるものと期待される。2009年（平成21年）夏には保健学科分室と統合した附属図書館医学分館として、サービスを開始する予定である。

（くらた きよし）



医学部分館の仮移転場所は、総合研究棟（旧基礎校舎）地階学生自習室（大会議室階下）及び地階図書館保存庫となっております。利用できる資料も限定されており、改修工事期間中は大変ご不便をお掛けしますが、ご理解ご協力の程お願いいたします。



# 学術講演会報告

## 「篤姫をテーマに」

### 第5回学術講演会を開催

附属図書館主催第5回学術講演会を10月25日、弘前大学創立50周年記念会館において、東京大学史料編纂所近世史部門の山本博文教授を招き、「江戸城大奥と天璋院篤姫」と題し開催した。この講演会は学生の学術研究に対する意識向上と地域社会への貢献など学術成果の普及を目的として、平成16年度の法人化以降毎年度開催され、今年度が第5回目となる。

講演では、篤姫が薩摩藩の一門の娘から徳川將軍の御台所となった経緯や篤姫の入った大奥とはどのような世界だったのかなど、篤姫の生涯を中心に、当時の幕府と薩摩藩の關係などを解説。三千人もの女性が働いていた大奥の実像、そして將軍御台所として大奥の頂点に立った篤姫が、激動の時代の中でどのように生きてきたかをNHK大河ドラマの「篤姫」と照らしながら語った。「篤姫」ブームでもあり、会場は大入りであった。



講演する山本博文東大教授

(企画管理担当 小山内英子)



熱心に聞き入る満員の来場者

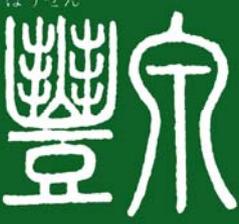
# 本学関係者の著作で、図書館に寄贈された図書と資料の一覧

平成20年1月～平成20年9月受贈分

学部名	寄贈者名	資料名	発行所	発行年	数	所蔵先
人文学部	長谷川 成一	北奥羽の大名と民衆	清文堂出版	2008	1	本館
		弘前藩における藩札の史料収集と研究	日本銀行金融研究所	1995	1	本館
	保田 宗良	マーケティングの新視点と情報処理	日本教育訓練センター	2007	1	本館
	関根 達人	亀ヶ岡文化雑考集：付・研究報告索引(弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告7)	弘前大学人文学部日本考古学研究室	2008	2	本館
	足達 薫	記憶の部屋	ありな書房	2007	1	本館
		オンリー・コネクト	ありな書房	2008	1	本館
	石黒 格	Stataによる社会調査データの分析	北大路書房	2008	1	本館
	木村 純二	折口信夫	講談社	2008	1	本館
	福田 進治	リカードの経済理論	日本経済評論社	2006	1	本館
	飯 考行	わんどの法律家(弘前大学裁判法ゼミナール調査報告書 2006年度)	弘前大学人文学部裁判法研究室	2007	1	本館
人文学部 考古学研究室	青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡発掘調査報告書(弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告6)	弘前大学人文学部日本考古学研究室	2008	2	本館	
教育学部	大高 明史	急務となっている砂丘湖の生物多様性保全に関する研究	新潟大学	2008	1	本館
医学研究科	兼子 直	てんかん教室 追補改訂	新興医学出版社	2003	1	本館
		患者と家族のためのてんかん Q&A 改訂4版	ライフ・サイエンス	2001	1	本館
	今泉 忠淳	木製牛乳箱の詩：写真集	水星舎	2008	2	本館
	広田 和美	研修医のための携帯エコー活用法	克誠堂出版	2008	1	分館
医学部・ 附属病院	加藤 博之	ER 流研修指導医マル秘心得 47	羊土社	2006	2	本館 1 分館 1
保健学 研究科	宮越 順二	放射線医科学	学会出版センター	2007	1	本館
	佐藤 達資	医療系学生のための病理学 第3版	講談社	2005	1	本館
理工学 研究科	小松 尚夫	Diophantine analysis and related fields, DARF 2007/2008	American Institute of Physics	2008	1	本館
	吉澤 篤	弘前大学大学院理工学研究科附属液晶材料研究センター活動報告書 第1期	弘前大学大学院理工学研究科附属液晶材料研究センター	2008	1	本館
農学生命 科学部	姫野 俵太	遺伝子の働きとその応用	丸善	2003	1	本館
	佐原 雄二	今、絶滅の恐れがある水辺の生き物たち	山と溪谷社	2007	1	本館
	万木 正弘	コンクリート工事	山海堂	2002	1	本館

農学生命科学部	附属白神山地有用資源研究センター	白神山地の魅力	弘前大学農学生命科学部附属白神山地有用資源研究センター	2008	1	本館
公開講座「岩木川へみず・ひと・しぜん」運営委員会	公開講座「岩木川へみず・ひと・しぜん」運営委員会	公開講座「岩木川へみず・ひと・しぜん」講演記録集 特別編2	公開講座「岩木川へみず・ひと・しぜん」運営委員会	2008	3	本館
名誉教授	青木 二郎	中国果樹史と果樹資源	青木二郎	1983	1	本館
	小笠原 茂介	青池幻想	思潮社	2008	1	本館
	松木 明知	八甲田雪中行軍遭難事件の謎は解明されたか	津軽書房	2007	2	本館 1 分館 1
		華岡青洲と麻沸散 改訂版	真興交易(株)医学出版部	2008	2	本館 1 分館 1
		Aequanimitas.	Mc Graw -Hill	1932	1	分館
正村 和彦	瞳孔の生物学と神経学	弘前大学出版会	2008	1	分館	
元教授	野村 忠弘	人間の健康と土壌	フィールドサイエンス舎	2007	2	本館
元助教授	高橋 等	からだ, 小さな造形	文芸社	2008	2	本館
弘前大学出版会	弘前大学出版会	リンゴ農家の経営危機とリンゴ火傷病の検疫問題	弘前大学出版会	2007	3	本館 2 分館 1
		日本語と英語で読む津軽学入門	弘前大学出版会	2008	3	本館 2 分館 1
		Introduction to networks engineering	弘前大学出版会	2008	3	本館 2 分館 1
		知能機械工学実験 I・II 平成 20 年度版	弘前大学出版会	2008	3	本館 2 分館 1
		知能機械工学実験 III 平成 20 年度版	弘前大学出版会	2008	3	本館 2 分館 1
		小学専門科学実験の手引き 2008 年度版	弘前大学出版会	2008	2	本館
		いまベトナムは : 経済の移行と発展への道のり	弘前大学出版会	2008	3	本館 2 分館 1
		青森県で生きる若者たち	弘前大学出版会	2008	3	本館 2 分館 1
		瞳孔の生物学と神経学	弘前大学出版会	2008	3	本館 2 分館 1
		リンゴ粕の飼料化技術 (牛用)	弘前大学出版会	2008	3	本館 2 分館 1
		Music Education Policy and Implementation	弘前大学出版会	2008	3	本館 2 分館 1
		しなやかな小学校の先生をめざして	弘前大学出版会	2007	1	分館
		Dr. 中路の健康医学講座	弘前大学出版会	2007	1	分館
弘前医学編集委員会	中澤 満	Emerging theories of host defense	弘前大学出版会	2007	1	分館
弘前大学医学部鵬桜会	弘前大学医学部鵬桜会	社団法人鵬桜会会員名簿 平成 20 年 3 月	弘前大学医学部鵬桜会	2008	1	本館
	高橋 剛夫	EEG atlas of photosensitive epilepsy	東北大学出版会	2008	1	分館

弘前大学生 活協同組合	弘前大学生 活協同組合	弘前大学卒業記念アルバム 平成 19 年度	弘前大学卒業ア ルバム編集委員 会	2008	1	本館
ご惠贈ありがとうございました。本館所蔵分は、附属図書館 2 階の「本学教員等新刊著作物」コーナーで展示紹介した後、図書館の蔵書に加え、広く活用させていただきます。今後とも、図書館資料の充実を図るため、教員の皆様のご協力をお願いいたします。						

	弘前大学附属図書館報「豊泉」第 28 号	発行日：2008年11月28日
	発行／弘前大学附属図書館 〒036-8560 青森県弘前市文京町1 TEL 0172(39)3162 編集／弘前大学附属図書館広報委員会 委員長 長谷川成一（館長・人文） 委員 蔵田潔（分館長・医） 柴正敏（理工） 谷口建（農生） 酒井量基（学術情報部） 中田晶子（学術情報部） 長谷川友紀（学術情報部） 對馬芙由子（学術情報部）	

標題の「豊泉」は、明治9年の「仏国学制」付録上巻中の「人智ヲ広ムルノ豊泉アリ」の文に基づき、  
 松原邦明名誉教授命名 題字：藤原楚水編「書道六體大字典」（三省堂）より